

(研究資料紹介)

芹沢銈介作「釈迦十大弟子尊像」補遺

門脇 佳代子

Addendum: "Portraits of the Disciples of the Buddha" Stenciled by Serizawa Keisuke

KADOWAKI Kayoko

キーワード：芹沢銈介 釈迦十大弟子尊像

要旨

芹沢銈介晩年の大作「釈迦十大弟子尊像」(1982年)は、釈迦の10人の高弟を1体ずつ描いたもので、彼の最後の型絵染作品である。日本では、十大弟子の図像は8世紀前後から絵画や彫刻に表わされてきたが、芹沢の作品における10人の各図像は、奈良・興福寺(奈良時代)、京都・清涼寺(平安時代)、京都・大報恩寺(鎌倉時代 快慶作)、神奈川・極楽寺(鎌倉時代)などを参考に制作された。それに加え、同時期に別バージョンとして試作されていた「釈迦十大弟子尊像」は、江戸時代の仏像事典『仏像図彙』を元に検討されている。こうした古作の研究は、図像の単なる模倣ではなく、モチーフの理解や表現の取捨選択を経て、芹沢の芸術世界をより奥深いものにしていったといえよう。

Abstract

In 1982, Serizawa Keisuke completed "Portraits of the Disciples of the Buddha" at 87 years of age. This is a series of 10 paintings depicting ten Buddhist monks—the Buddha's disciples. In Japan, iconography of the Buddha's ten disciples dates back to the 8th century. Serizawa created his own "Portraits of the Disciples of the Buddha" with reference to several statues of the ten disciples made between the 8th and 13th centuries. He also used the encyclopedia of Buddha statues from the Edo period as a reference. However, rather than simply imitating these old works, he studied them to enhance his own art.

はじめに

芹沢銈介美術工芸館(以下、当館)は、1989年(平成元年)に東北福祉大学の附属施設として国見キャンパスの敷地内に開館し、30年にわたって学内外の多くの来館者に親しまれてきたが、2019年1月に仙台駅東口キャンパスに陳列室を移し、より幅広く芹沢芸術の発信を目指すことになった。そして、翌2020年1月11日(土)～4月3日(金)には、移転リニューアル1周年を記念し「芹沢銈介の釈迦十大弟子尊像展」が開催された。(図1)「釈迦十大弟子尊像」は最晩年の作品のひとつであるが、本展覧会では型彫り用下絵や初公開の肉筆下絵などを合わせて展示し、完成に至る過程を辿ることで、芹沢の妥協なき制作姿勢と創作への情熱に迫った。

日本を代表する染色作家のひとりである芹沢銈介(1895年生～1984年没)は、87歳で型絵染の大作「釈迦十大弟



図1 展覧会チラシ

子尊像」(1982年)を完成させた。十大弟子とは仏教の開祖・釈迦の高弟10人——舍利弗、目犍連、大迦葉、須菩提、富楼那、迦旃延、阿那律、優波離、羅睺羅、阿難陀——のことで、本作は1体ずつを等身大に表わした、10点からなるシリーズである。依頼者によりインド・クシナガラ（現インドネシア）の釈迦堂に納められた墨型絵染1組と、現在柏市で所蔵する漆型絵染1組、また同じ型を用いつつもインドに送られたものとは異なる紙と墨を使用した墨型絵染が国内に若干組存在し、他に頒布用の縮小版として制作された「釈迦十大弟子尊像」には3種類のヴァリエーション（墨・薄墨・彩色）がある。

型紙によって同じ図柄を複製できる型絵染の技法だが、材料や寸法の異なるヴァリエーションの中で、ただ1組のみ制作されたのが漆型絵染「釈迦十大弟子尊像」（柏市）である。本作については技法をはじめ不明な点が多かったが、当館で保管する関連記録の中に、制作経緯を示す資料が見つかった。¹かつて筆者は、これらの記録および当時漆の工程を担当した漆職人・佐藤竹治氏の談話をもとに、使用した材料や作業手順を明らかにし、また芹沢が従来の型染の枠を超えた新しい表現の可能性を追い続けたことを、本作を通して読み解いていった。²

本稿では、先の報告で取り上げることのできなかった、芹沢が創作の参考とした十大弟子像について検討する。芹沢の作品における10人の各図様は、先行する十大弟子の仏像彫刻——奈良・興福寺（奈良時代）、京都・清凉寺（平安時代）、京都・大報恩寺（鎌倉時代 快慶作）、神奈川・極楽寺（鎌倉時代）など——を参考にしたことがわかっているが³、改めて各像と芹沢作品との異同を整理したいと思う。また、この度の展覧会では、2点の肉筆下絵が初公開された。これは、完成版とは異なる図様で検討された別バージョン（異種）と考えられるが、芹沢が参照した『佛像図彙』と共に紹介する。

1 鎌倉期以前の十大弟子像

日本における十大弟子像⁴の早い例としては、奈良・法隆寺金堂の第一号壁釈迦淨土図（焼損）に描かれた10人の僧や、同じく法隆寺の五重塔の北面に表わされた涅槃の情景に登場する僧たち（塑像）が考えられ、確実なものとしては8世紀前半に造られた奈良・興福寺の十大弟子像（西金堂旧蔵）⁵が挙げられる。これら涅槃や説法といった場面において釈迦の周囲をとり囲む仏弟子としての僧の図像は、歴史上に実在した釈迦を意識したものである。

一方、平安時代になると、京都・清凉寺の釈迦信仰にち

なむ造像が目される。寛和2年（986）に東大寺僧齋然が宋より請来した釈迦如来像は、三国（インド・中国・日本）伝来の生身釈迦仏として広く信仰を集めたが、それに随侍する像として、11世紀、新たに十大弟子像が造立された。これが、現在、京都・清凉寺に伝わる木造の十大弟子像⁶である。独特な姿をとる清凉寺の釈迦像は、靈驗仏として各地に模刻像（清凉寺式釈迦）が造られたが、それらに伴う十大弟子の遺品に、鎌倉時代の京都国立博物館像（常楽院旧蔵）⁷や神奈川・極楽寺像⁸、神奈川・称名寺像などが知られている。また、京都・大報恩寺の快慶一派が制作した十大弟子像⁹も優れた作として有名である。

ところで、鎌倉期以前の十大弟子像の中で、芹沢が具体的な像容を参考にした可能性が高いのは、興福寺・清凉寺・大報恩寺・極楽寺の諸像である。具体的な類似点に関しては後ほど詳述するものとし、ここではそれぞれの十大弟子像の概要について述べる。（以下、巻末の「別表」を参照）

①奈良・興福寺「十大弟子像」6体

脱活乾漆造 彩色 像高146.0～154.8cm¹⁰

奈良時代 天平6年（734） 国宝

興福寺西金堂（焼失）の旧像。西金堂は、天平5年（733）に没した橘三千代追福のため娘である光明皇后が発願し、その一周忌に供養された。堂内には、本尊の丈六釈迦如来像を中心に合計29体の尊像が安置され、それらは『金光明最勝王経』の「夢見金鼓懺悔品」に基づく造像と考えられている。西金堂は創建後4度の火災により多くの像を失っており、十大弟子像も寺に現存するのは6体のみである。

奈良時代に流行した、麻布を漆で固めてつくる乾漆造を用い、内省的な静けさをまとう繊細な人物表現を行っている。僧形の通例である円頂に袈裟をまとい、足元にはインド風の板金剛（サンダル）を履いている。群像としてのまとまりの中に、老若の違いや着装のヴァリエーションなど、個性の表出を見てとることができる。

現存する6体は舍利弗・目犍連・須菩提・富楼那・迦旃延・羅睺羅と呼ばれるが、制作当初の名称は不詳である。この内、[羅睺羅]は目を閉じることから修行により盲目となった阿那律の像で、[須菩提]は年若く美男子であることから阿難陀の像である可能性が高い。

②京都・清凉寺「十大弟子像」10体

木造 彩色 像高78.7～82.1cm

平安時代（12世紀） 重要文化財

先述の通り、清涼寺の本尊釈迦如来像と共に伝わった十大弟子像。ヒノキ材の割刳造で表面は錆下地漆塗彩色仕上げとし、衣部には多彩な文様を施しているが、現状はほとんど黒変している。各像の呼称は寺伝によるが、根拠を明らかにすることはできない。

本尊とは制作年代を異にしており、奥健夫氏によれば、定朝様式を基調としつつ衣文には自由な趣が見てとれることから、11世紀半ばないし後半の早い時期が想定されている。¹¹すなわち、本尊光背の追加ならびに台座の改造と一連の事業であった可能性が高い。なお、これらは清涼寺釈迦の信仰に伴う新たな十大弟子像の出現であるが、[富楼那]の片肌脱ぎで腰を曲げて柄香炉を捧げる姿は興福寺西金堂旧蔵の乾漆像に同形の像[迦旃延]があり、一部で古典作例に範をとっていることが指摘されている。

③京都・大報恩寺「十大弟子像」10体

木造 彩色 玉眼 像高94.4～99.2cm

鎌倉時代 承久2年(1220)頃 快慶等作 重要文化財

千本釈迦堂の名で知られる大報恩寺本堂の本尊に随侍する十大弟子である。[目鍵連]と[優波離]の足柄には「法眼快慶」を示す墨書銘があり、他の像についても快慶の指導のもと、一門の手で造立されたと見られる。また、[目鍵連]の台座には「正三位行兵部卿藤原朝臣忠行」の刻銘があり、忠行がこの肩書にあった建保4年(1216)末から承久元年(1219)、また阿難陀の納入経巻奥書に承久2年(1220)の年紀があることから、十大弟子像はこの前後に造られたものであろう。

それぞれの尊名は寺伝によるもので、鎌倉時代らしい写実的な手法を活かし、優れた個性表現を行っている。例えば面貌のみを見ても、唇を結び伏し目がちに視線を落とす[迦旃延]には深い知性を、口を開けて歯を見せながら眉を寄せて睨み据える[大迦葉]には厳しく激しい信仰心を感じるように、個々の性格付けを意識していることが窺える。効果的な玉眼の使用も、大報恩寺像の魅力である。¹²

④神奈川・極楽寺「十大弟子立像」10体

木造 彩色 玉眼 像高83.3～88.0cm

鎌倉時代 文永5年(1268) 重要文化財

清涼寺式釈迦の一つとして知られる極楽寺の本尊に付き従う十大弟子の像である。内2体から「文永五年戊辰」などの像内銘が見つかっており、その前年の文永4年(1267)に

忍性が極楽寺に入寺していることから、忍性によって釈迦如来および十大弟子の造立が行われたものと考えられている。

バラエティに富んだ癖の強い相貌が印象的で、いずれの像も手の構えや持物、着衣の服制、姿勢を少しずつ変えており、群像としてもよくまとまっている。

他の十大弟子像と同様、寺伝による名称比定はあるものの、その根拠を明らかにすることはできない。ただし、老相で前歯の欠けた1体が[大迦葉]、若やいだ風貌でかつ眉目秀麗な1体は[阿難陀]、同じく若やいだ表情を示すものは[羅睺羅]ではないかと考えられる。

2 芹沢作「十大弟子尊像」と先行像との比較

次に、芹沢の「十大弟子尊像」のイメージの拠りどころを探るに当たり、先に挙げた十大弟子と芹沢作品との類似点を個々に抽出し見ていくことにする。なお、比較において、芹沢の「十大弟子尊像」ではヴァリエーション中の頒布用縮小版(墨染)を用いた。その概要は次の通りである。以下、これを芹沢本と呼ぶ。

芹沢銈介作「釈迦十大弟子尊像」10図(巻末[別表])

紙本型絵染(墨) 約108×50cm 1982年

東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館所蔵

芹沢本の大きさは、大版(インド・クシナガラ)の釈迦堂安置)の約2分の1。紙は埼玉県の小川、江原土秋特漉和紙で、「天心社刊行会」の透かしが入っている。薄手のなめらかな表面の和紙で、色はわずかに黄みがかっている。強いしぼのある強製紙に染めた大版に比べしみは見られず、墨染めの輪郭線はわずかに固い印象を与える。1982年、天心社刊行会から限定50セットが販売された。

なお、十大弟子の形姿については、大版から縮小版に移行する際に2カ所の改変が行われている。一つは[目鍵連]の持つ水瓶が無地から唐草文様入りになっている点、そしてもう一つは[阿難陀]の面部において口元の顎の肉付きを示す弧線が上下逆になっている点である。¹³ただし、この改変は先行像との比較において特に問題になるものではない。

それでは、以下に各弟子像について見ていくことにする。巻末の[別表]十大弟子尊像対照表には、像容の比較対象として、興福寺像・清涼寺像・大報恩寺像・極楽寺像を掲載した。¹⁴適宜、参照願いたい。

はじめに、「知恵第一」と称される舍利弗は、弟子たちの

中で最も上位にあった人物である。バラモン出身で、若い頃から学問に秀で、はじめ懐疑論者サンジャヤの弟子となるが、後に釈迦の弟子となり衆生の教化に尽力した。芹沢本の姿は、正面を向いて直立し、墨染の衣をまとい、柄の長い団扇を持つ。持物・手の構え方ともに大報恩寺像〔舍利弗〕に倣っている。ただし、大報恩寺像が偏袒右肩に着装するのに対して、通肩にまとう衣の表現は異なっている。大報恩寺像〔舍利弗〕に限らず、先行する仏像には古代インドの礼法に由来する偏袒右肩（左肩に法衣をかけ、右肩を露出する、恭敬の姿）が多くみられるが、芹沢本の十大弟子は肌の露出を控えた表現をとっている。

舍利弗とともに初期の仏教教団を支えた目犍連は、「神通第一」と説かれる。裕福なバラモンの家に生まれ、友人である舍利弗と同様、サンジャヤの弟子を経て、釈迦の弟子となった。超能力をつかって釈迦の護衛も務めたといい、餓鬼道に堕ちた母を救うため目犍連が供養した行法が今日の盂蘭盆会になったといわれている。芹沢本では、右手に蓮の蕾を差した水瓶を持ち、左手は掌を上にして胸の前に置くが、最も近いのは極楽寺像〔目犍連〕である。着衣や足元のサンダル、表情においても共通点が多い。相違点としては、袈裟を吊る環を縄にしている点と足元の洲浜座が挙げられる。芹沢本10図に共通する洲浜座は、興福寺像を参考にしたものであろう。

「頭陀第一」、すなわち最もよく執着をはらい清貧な修行を行った大迦葉は、釈迦入滅後に教団を統率し、第一回の経典結集の際には上座をつとめた。バラモンの出身で若くして出家し修行を続けていたが、釈迦が悟りを開いてから3年目頃に弟子となり8日目には阿羅漢（聖者）の境地に至ったという。芹沢本では、右手に錫杖を持ち、左手に頭陀袋を持つ。両手の持物が共通するのは、清涼寺像〔大迦葉〕である。錫杖の傾きや通肩の衣など、差異も認められるが、腹前の衣文線や左肩で折りたたんだ衣褶、浮き出た肋骨など、清涼寺像の影響が窺われる。

仏教の基本教理である空（くう）の理解が最も深かったことから「解空第一」と説かれる須菩提は、舎衛国の長者の家に生まれた。釈迦の説法に感じて弟子となり修行に励み、争わないことでも第一であったという。芹沢本の姿は、興福寺像〔須菩提〕と着衣や手の構え、履物まで共通しており、極めて共通性が高い。一方で、興福寺像〔須菩提〕はあどけなさを残した柔らかな表情を浮かべるのに対して、芹沢本では瞳を閉じて眉根を寄せ、若々しさの中に静穏な落ち着きを見せている。

「説法第一」の富楼那は、出身に諸説あるが、十大弟子の

中では最も早く弟子になった人物である。多くの弟子たちの中でも特に弁舌に優れていたとされる。芹沢本では、両手で柄香炉を捧げ、斜め右方向に体を向けており、10人の中で特に動きの大きい像である。柄香炉を持つのは、清涼寺像〔富楼那〕と大報恩寺像〔富楼那〕に見られるが、凸凹とした頭頂部や杳のデザインなどの細部も含め、清涼寺像に近似している。

仏の教えを解説することにおいて一番であったのが、「論議第一」の迦旃延である。バラモンの出身とされ、経歴には諸説あるが、初期の仏教伝道で重要な働きをした。芹沢本では、胸の前で指を絡めて両手を組む。同様の手勢は、清涼寺像〔迦旃延〕や極楽寺像〔迦旃延〕に見られる。ただし、両像とも芹沢本と表情は大きく異なっており、また首元まで詰めた衣の着け方は独特で、左肩前には袈裟を吊るす環が描かれている。

「天眼第一」の阿那律は、釈迦の従弟に当たる。釈迦の説法中に居眠りをして叱責され、それを恥じて以後不眠の誓いを立て、ついに失明してしまうが、その代わりに天眼（見通す能力）を得たという。芹沢本では、上半身をやや右に向け、左手で右手首を下から掴む姿で表わされているが、同様の手勢のものには大報恩寺像〔阿那律〕と極楽寺像〔富楼那〕がある。ところで、手の構えは異なるものの、清涼寺像〔阿那律〕は首を右方向に傾けており、唇を引き結んだ厳しい表情には芹沢本との共通性が見て取れる。あるいは、極楽寺の十大弟子像は全般に眼光鋭く癖の強い顔立ちをしており、芹沢本〔阿那律〕と感覚的に近いものを感じる。

「自律第一」の優波離は、元は身分の低い理髪師だったが戒律に詳しく、第一回の経典結集の際には彼が律を誦出した。芹沢本の、両手の人差し指を立てて胸前に組む手の構えは、清涼寺像〔優波離〕と極楽寺像〔優波離〕に見られるが、衣文線の作り方や杳の形状からみて、清涼寺像を参考にしたと考えられる。本図の特徴として、顔に濃い陰影が施され、他の9人に比べて特異な印象を受ける。この点については、芹沢の手元にあった資料の一つ、清涼寺像〔優波離〕の写真コピー¹に手がかりが求められる。それは粗いコピーによって明暗が強く出もので、おそらく芹沢はこのデフォルメされた陰影表現を面白く思い、創作に活かしたものと思われる。

「密行第一」と説く羅睺羅は、釈迦が出家をする以前に生まれた実子で、釈迦によって出家させられたが、よく戒律を守り正しい修業を重ねたという。両肩を覆った衣の中に指先まで隠し、肌を極力見せない姿は、興福寺像〔羅睺羅〕

と一致する。芹沢本の眉間の上に表わされた弧線は、興福寺像の眉根を寄せる表情によって刻まれた皺を連想させる。

最後の一人、「多聞第一」の阿難陀は、釈迦と年齢の離れた年下の従弟で、常に釈迦の身边にあってその教えに接した。記憶力に優れ、第一回結集の際は多くの教説を復唱し、經典編纂に重要な役割を果たした。容姿端麗でしばしば婦女に誘惑されたというが、芹沢本でも若々しく整った相貌で表わされている。芹沢本〔阿難陀〕のように胸前で合掌する像は、清涼寺像・大報恩寺像・極楽寺像それぞれの中に複数あるが、着衣や沓、なで肩のすっきりとした立ち姿まで、大報恩寺像〔阿難陀〕に近いことが確認できる。

以上、芹沢本10図について、興福寺・清涼寺・大報恩寺・極楽寺の諸像と比較してきたが、〔目犍連〕〔須菩提〕〔富楼那〕〔羅睺羅〕〔阿難陀〕のように、先行する仏像から多くの影響を受けている図がある一方で、〔迦旃延〕〔阿那律〕〔優波離〕のように一部を取り入れながら、また複数の像を組み合わせることで新しい図像を考案している例も見られた。芹沢は、古作に倣う際にもそのまま転用するのではなく、異なる個性をもった10人の弟子たちを群像として表現するため、それぞれに相応しいと思う部分を採用し、また表情に独自のアレンジを加えるなどしながら、芹沢の十大弟子を再構成していったのである。

3 「釈迦十大弟子尊像下絵 異種」5点 (図2)

- | | | |
|------|--------|-------|
| ①舍利弗 | 木炭・朱 | 持物は錫杖 |
| ②目犍連 | 木炭・朱 | 持物は蓮華 |
| ③須菩提 | 木炭・朱 | 持物は如意 |
| ④阿那律 | 木炭・朱 | 合掌 |
| ⑤阿難陀 | 木炭・朱・墨 | 合掌 |

2020年1月からの当館展覧会で出品された2点(図2-②、図2-③)の肉筆下絵は、同時に描かれたと見られる3点と合わせて、まくりの状態伝わってきた。本紙の寸法は104.0×51.0cmである。もとは東京・蒲田の芹沢の工房にあったものを、芹沢長介初代館長(芹沢銈介の長子)が見つかり、当館の所蔵とした。薄手の洋紙と思われる紙に木炭で描き、朱で描き起こしており、〔阿難陀〕のみさらに墨で上描きをする。5点の内、〔目犍連〕を除く4点には、芹沢の手で余白に尊名が走り書きされている。

これらの異種5点は、全て『仏像図彙』に典拠を求めることができる。『仏像図彙』とは、元禄3年(1690)に刊行された仏像事典である。仏像や仏具などを描き、画師の



①舍利弗

②目犍連



③須菩提

④阿那律



⑤阿難陀

図2 「釈迦十大弟子尊像下絵 異種」5点
東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館所蔵

参考としたもので、著者は土佐秀信。その後、18世紀後半に増補改訂版が出され、明治19年(1886)に梶川版と寺田版の2つの増補版復刻が行われた。芹沢がこの『仏像図彙』



図3 『明治増補 諸宗仏像図彙 四』（十大弟子部分）
梶川辰二発行 1886（明治19年）

所収の十大弟子（図3）を目にしていたことは、両者を並べてみても間違いなく、「釈迦十大弟子尊像」制作のために関連の図像を渉猟し、検討を重ねたことが理解される。

残念なことに、異種版の釈迦十大弟子尊像が完成に至ったかは不明である。現在、当館には、[須菩提]と[阿難陀]のみ型絵染の異種版（図4）が残っているが、いずれも本紙のみで表装はされていない。

異種版については、芹沢が型絵染の上から彩色を施している、制作中のスナップ写真が残されている。（図5）芹沢の背後には、大版の十大弟子尊像肉筆下絵が壁一面に立てかけられており、これによって、同時期（1982年）に全く異なる図様の釈迦十大弟子尊像が試みられていたと推測される。

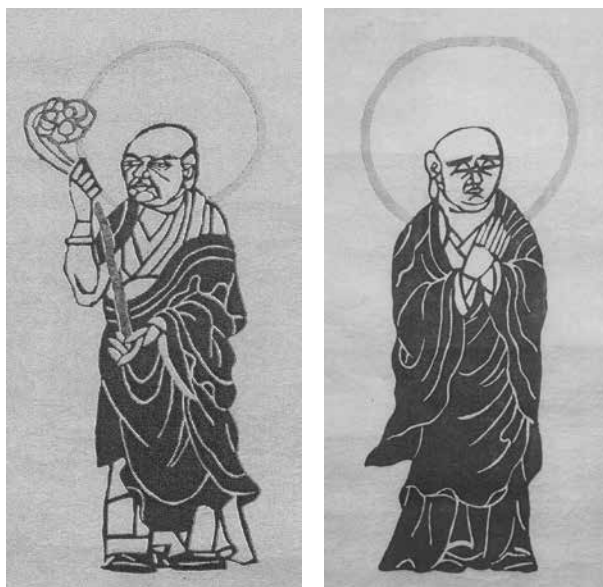


図4 「釈迦十大弟子尊像 異種 須菩提・阿難陀」2点
東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館所蔵



図5 芹沢銈介 制作風景

おわりに

芹沢が制作した大版「釈迦十大弟子尊像」の内、クシナガラの釈迦堂と柏市に所蔵される2組に使用された強製紙は、富山の桂樹舎に特注し渡されたものである。民芸の同人との所縁も深かった桂樹舎の吉田桂介氏は、芹沢が十大弟子に取り組んでいた頃の出来事を回想して、次のように述べている。「（芹沢先生が）奥の方から一冊、又一冊と書物を持って見えるのである。書物は写真集であるから、いずれもズッシリと目方がある。興福寺の十大弟子、浄瑠璃寺の十大弟子、又は朝鮮慶州の石窟庵十大弟子等、いずれも古来より名のある釈迦十大弟子の写真が載っているものであった。」¹⁵ 当時、芹沢は高齢のために型彫りを一気に仕上げる事ができないほど体力が落ちていたが、吉田氏は「そうした骨身を削る痛苦の中で、十大弟子の構想に腐心されていられたお姿には、何か鬼気迫る切迫したもの」を感

じたという。当館所蔵の十大弟子像関連記録の中にも、仏像写真や十大弟子をとり上げた書籍の一部コピー（佐和隆研編『仏像図典』など）が含まれていた。芹沢は、こうした資料を基に、先達の生み出した十大弟子について研究を重ねたのであろう。





































さらに、図版による検討だけではなく、現地に足を運んだとの証言もある。芹沢に「釈迦十大弟子尊像」の制作依頼をした新田浩氏（天心社刊行会・社長）は、回想録の中で「この平安後期の作と伝えられる十大弟子像（筆者註清凉寺像）をスケッチするために、京洛のホテルからかよってくださった芹沢銈介のご苦労によって十大弟子像は完成されたと思慮している。」¹⁶と述べている。制作のため芹沢が現地に足を運ぶことは珍しいことではない。例えば、『法然上人絵伝』（1941年）では、京都・知恩院や上人像を所蔵する宮城・往生寺を訪ねているし¹⁷、また絵本『妙好人因幡の源左』（1979年）では源左の菩提寺である鳥取・願正寺まで出向き、当地の風景や服装、暮らしぶりなどを写真やスケッチにおさめている。¹⁸しかし、体力的にも制約が当然ある中で、年齢を重ねてなお真摯に向き合う制作姿勢に一切の妥協がないことに、脱帽を禁じ得ない。いとも自在に生み出されたかの作品の背後には、膨大な研究の蓄積と修練があったことを、改めて痛感するのである。


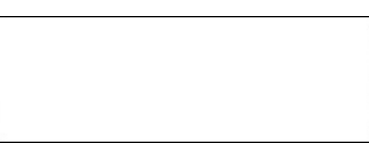

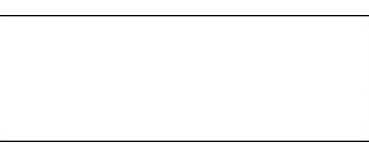



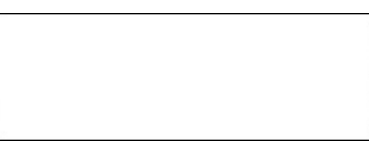












註

- これらの関連記録については、当館元学芸員の濱田淑子氏よりご教示をいただいた。「釈迦十大弟子尊像」関連の記録類の主なものは以下の通り。
 - ・「十大弟子制作依頼の覚書」（昭和56年11月末日）の写し
 - ・「釈迦十大弟子縮小版製作工程報告書 S.57.7.20」
 - ・桂樹舎「「釈迦十大弟子」用紙製作工程」説明書（1982年6月29日）
 - ・写真12枚：漆型絵染の十大弟子尊像制作風景
 - ・「芹沢銈介『型絵染釈迦十大弟子』頒布のお知らせ」
 - ・『釈迦十大弟子尊像図録』天心社刊行会 1982年（大原美術館にて1982年9月1～26日まで「釈迦十大弟子尊像展」を開催）
 - ・手書きコピー製本：水原徳言『「釈迦十大弟子尊像」を拝む』（大原美術館での「釈迦十大弟子尊像展」に関する所感）
 - ・新聞の切抜き ①「大原美術館 今日から『釈迦十大弟子尊像展』—芹沢芸術の総決算 インドに贈る前展覧—」（1982年9月1日「朝日新聞 岡山版」）/②「型絵染の傑作など22点一倉敷で「釈迦十大弟子尊像展」（1982年9月2日「山陰新聞」）
 - ・興福寺および清凉寺の十大弟子像（彫刻）の写真コピー
 - ・美術関連書籍の十大弟子に関する部分コピー
 - ・厚紙に型紙の写真やコピーを貼りつけたもの
 また、上記のほか、2020年「芹沢銈介の釈迦十大弟子尊像展」開催準備期間中に、当館学芸員の本田秋子氏より、制作関連資料として興福寺・清凉寺・極楽寺の十大弟子像の写真が見つかったことをご教示いただいた。

- 門脇佳代子「芹沢銈介「釈迦十大弟子尊像」—型絵染への挑戦—」『東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館年報』6号 2015年 pp.63-72
- 濱田淑子「芹沢銈介 釈迦十大弟子尊像」『月刊 寺と生活』通巻第121号 1997年12月 pp.20-24
- 白鳥誠一郎「釈迦十大弟子尊像」『芹沢銈介没後30年記念50の作品でたどる芹沢銈介88年の軌跡』静岡市立芹沢銈介美術館 2014年 pp.102-103
- 十大弟子については、以下等を参照。
 - 西村朝朗『釈迦と十大弟子』新潮社 2004年
 - 西木政統（コラム）「十大弟子の役割—釈迦の実在性を求めて」『特別展 京都大報恩寺 快慶・定慶のみほとけ』東京国立博物館・読売新聞社 2018年 pp.78-79
 - 山本陽子「大報恩寺蔵十大弟子伝優婆離像の名称について—瞳の白点表現を中心に—」『日本宗教文化史研究』45号 2019年 pp.18-35
- 水野敬三郎「十大弟子立像」『奈良六大寺大観』第7巻（興福寺）岩波書店 1969年 pp.85-91
- 浅井和春（解説）「十大弟子立像」『東大寺・正倉院と興福寺』（日本美術全集第3巻）小学館 2013年 p.226
- 奥健夫『清凉寺釈迦如来像』（日本の美術513）至文堂 2009年 pp.74-77
- 奥健夫（解説）「十大弟子立像 富楼那・阿難」『密教寺院から平等院へ』（日本美術全集第4巻）小学館 2014年 pp.258-259
- 猪川和子「京都常楽院の十大弟子と鎌倉地方の十大弟子」『金沢文庫研究』13巻1号 1967年 pp.1-7
- 岩田茂樹（解説）「釈迦如来立像」「十大弟子立像」『生誕800年記念特別展 忍性—救済に捧げた生涯—』奈良国立博物館 2016年 pp.255-256
- 西木政統（解説）「十大弟子立像」『特別展 京都大報恩寺 快慶・定慶のみほとけ』東京国立博物館・読売新聞社 2018年 pp.226-227
- 山本論文 前掲註4
- 興福寺・清凉寺・大報恩寺・極楽寺の十大弟子像の寸法は、文化庁監修『国宝・重要文化財大全4 彫刻（下巻）』（毎日新聞社 1999年）の記載を引用した。
- 奥解説 前掲註6
- 近年、山本陽子氏により、伝優婆離像に関し玉眼の中心に白点が描かれていることから、本来は天眼第一とされた阿那律像であるとの見解が示された。山本論文 前掲註4
- 門脇論文 前掲註2
- [別表]を作成するにあたり、文化庁監修『国宝・重要文化財大全4 彫刻（下巻）』（毎日新聞社 1999年）に掲載の写真と尊名を参照したが、極楽寺像のみ以下の図録に掲載された尊名になるよう、像の入れ換えを行った。『特別展 鎌倉の精華—鎌倉国宝館開館八十周年記念—』鎌倉国宝館 2008年 pp.14-15
- 『生誕800年記念特別展 忍性—救済に捧げた生涯—』奈良国立博物館 2016年 pp.163-167
- 吉田桂介「釈迦十大弟子制作の頃」『民藝』379号 1984年 pp.18-19 なお、浄瑠璃寺を例に挙げているのは吉田氏の勘違いであろうか。
- 新田浩「芹沢銈介 回想」『回想—美術家たち—〈私家版〉』天心社刊行会 1991年 pp.120-121
- 芹沢銈介画・小川龍彦編『新定 法然上人絵伝』理想社 1954年 p.46 小川龍彦（解説）
- 門脇佳代子「（研究資料紹介）芹沢銈介作 絵本『妙好人因幡の源左』」『東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館年報』5号 2014年 pp.87-97

[別表] 十六弟子尊像对照表

	阿難陀	羅睺羅	優波離	阿那律	迦旃延	富樓那	須菩提	大迦葉	目犍連	舍利弗	奈良・興禪寺	京都・清涼寺
												
												
												

京都・大報恩寺	神奈川・極楽寺
	
	
	
	
	
	
	
	
	
	

図版出典

- 奈良・興福寺「十大弟子像」6体 文化庁監修『国宝・重要文化財大全4 彫刻(下巻)』毎日新聞社 1999年 p.552
- 京都・清凉寺「十大弟子像」10体 同上 pp.370-371
- 神奈川・極楽寺「十大弟子像」10体 同上 pp.372-373
- 京都・大報恩寺「十大弟子像」10体 同上 pp.373-375

付記

芹沢銈介作品の掲載にあたり芹沢恵子様のご配慮と使用許可をいただき、ここに深く感謝申し上げます。また図版掲載へのご高配を賜りました関係各所に深く感謝申し上げます。英文要旨については東北福祉大学のKen Schmidt教授にご協力をいただきました。感謝申し上げます。